

医事・文談

(九百四十二)

平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その230

子規と夏目漱石(三十九たび続)

平凸凹↓獺祭詞兒

岡山市内山下町百三十八番邸片岡方の漱石から、松山市湊町四丁目十六番戸へ帰省中の子規へ宛てたもの。この明治25年7月、漱石は亡き次兄直則の妻、小勝の里片岡家に滞在していた。更に小勝が直則没後、再嫁した当時の岡山県上道郡金田村(現・岡山市西大寺金田)の岸本家にも滞在した。直則は栄之助とも称したらしい。

直則は安政5年(一八五八)生まれで、明治20年(一八八七)に死亡している。妻だった小勝の実家を、漱石が訪れたのは兄の死去後5年も経ってからである。

夫の死によって実家に戻り、更に再縁しているところに、夫の弟を迎えているところからすると、片岡家と夏目家は、ちよっと考えられないくらい濃密な関係を結んでいると思われる。

しかも直則は、漱石の「硝子戸の中」という随筆中では「此兄は大の放蕩もので、よく宅の懸物や刀剣類を盗み出しては、それを二足三文に売り飛ばすといふ悪い癖があった」と書かれている。

しかしこの次兄と、三兄の直矩(駿松(二)叔父)とは共に南校に通っていたというから、その後東京大学に進学の予定であったのであろう。素行は芳しくなかったかもしれないが、相当の頭脳を有していたことはたしかである。長兄も開成校出身である。

その死去後も妻の実家では悪い感情を抱いていなかったらしく、弟の漱石の滞在についても「一向平気にて遠慮なき家なり」と漱石は書き、子規に気がねしなくてもいいから、閑谷巒見物かたがた岡山へ来たらすすめていくから、閑谷巒見物かたがた閑谷巒は岡山藩主の池田光政が、民間子弟の教育のために建てた学校で、現在最古の学校建築として残っている。

小勝は再縁した岸本家にも漱石の宿泊を許しているくらいだから、漱石に充分の親しみを覚えて

いたのであろう。

余談はさておき、漱石のこの旅行は、子規と行を共にしたもので、7月7日出発、子規は京都で漱石に分かれて郷里松山に向い、漱石は岡山に着して嫂小勝の実家片岡家に三週間余も滞在した。

この手紙には、子規の学年試験落第のことを「面黒き結果」となったりと書かれ、今年辛抱して文学士の称号を得たらと忠告していることは本稿25に記述したとおりである。

子規は多くの書物を身辺におくのを、獺が魚を祭るが如く並べることには、自身の書齋を「獺祭書屋」と名づけ、俳論俳話を書くときは「獺祭書屋主人」と称した。それによって宛名が獺祭詞兒となったのである。(25年7月19日発)

平凸凹↓子規さま

これも同じく岡山市の片岡方の漱石から松山市の子規宛のものである。

この年7月23日から翌日にかけて、岡山県下は前代未聞の大洪水に遭った。旭川が氾濫したのである。片岡家では床上五尺(一五〇センチ)の浸水であった。

片岡家に逗留していた漱石は、梶戸坂と呼ばれる小高い場所の光藤家の離れに避難した。八日目に帰ってみると「床は落ちて居る、畳は濡れて居る、壁は振り落ちてある、いやはや目も当てられぬ次第。四斗樽の上へ三畳の畳を並べて、これを客間兼寢処とし、戸棚の浮き出したのを次の間の中央に据え、その後左右に腰掛と破木机を併べ、これを食堂となす」(漱石書簡による)という惨憺たる有様。

これでは厄介になつているのも気の毒と、一時は帰京しようか、或は子規のところへ避難しようかとも思ったが、今少し落ち付くまで逗留し、ゆるゆる帰宅せよとのことでの気の毒ながら未だ滞在中のようだ。

しかもこの惨状のなか、修復もままならぬのに、片岡家の主人は、金比羅に案内するというので、漱石は導かれるまま四国に渡り、さらに松山に赴いて子規に会い、のちにいろいろ関係を生ずる高浜虚子とも初対面することとなる。(明治25年8月4日発)

(表紙写真)

アーモンドの花

札幌医科大学医師会 浅井 康文

シリア政府の日本政府への救急医療技術支援要請で、イラク戦争が始まった翌日にシリアに向かった。シリア北西部の目的地ハッサケには、ダマスカスより、シリア砂漠を突っ切って入る。直線で500km以上あり、途中での休憩が

必要である。一息ついたのが砂漠の真ん中にある、映画の題名をとった「バクダッドカフェ」である。ここに桜のような花が、たくましく咲いていた。これがアーモンドの木と聞き、思わずシャッターを切った。